

# その後流行なく心配無用

福島医大脳神経  
内科学講座講師

## 中原登志樹医師

嗜眠性脳炎は流行性脳炎の  
一つで、1917(大正6)

年にコンスタンチン・フォン・エコンモ(オーストリア)によって報告されたことから、エコンモ脳炎とも言います。1918年ごろから約10年間に渡って、全世界で約500万人が罹患(りかん)し50万人が死に至ったとされています。

日本では1919(大正8)年に新潟などで発症が確認されています。風邪のような症

状から始まって、頭痛、節々の痛み、傾眠(ウトウトとまどろむ程度の軽い意識障害)状態になり、数日で死亡する患者もいました。また、反対に全快する症例もあったそうです。

急性期には脳幹部の炎症のため患者の多くは目が動かなくなると記録されています。また治癒したと思われる患者の約3分の1が、数カ月から数年後にパーキンソン病に似た症状を発症したことがこの脳炎の特徴であり、脳幹の一部である中脳の黒質ドパミン神経細胞の荒廃(神経の減少)がパーキンソン様症状の原因と考えられます。

本症の原因はインフルエンザや他のウイルス、細菌などが疑われましたが、現在でも全く分かっていません。突然流行して世界を震撼(しんかん)させて、10年後には突然姿を消しました。本当に多くの謎を残したまま消滅した病気の一つです。

ただ、この脳炎はその後の流行は確認されていませんので、いたずらに心配する必要はありません。

1929(昭和4)年に、最後の流行があった際に、福島民報に連載された大原病院の岩水幾太郎医学博士の連載「流行性脳炎の話」は、興味深いものがあります。9月11日から16日まで6回の連載です。

岩水博士は原因のさまざまの可能性、実際に診察した患者の様子、予防方法を詳細に書いています。そして、嗜眠性脳炎とパーキンソン病との関連性を指摘するなど、情報が入らなかつたと思われる当時としては、素晴らしい考察をしています。

このような福島県の先人を誇りに思います。



嗜眠性脳炎について  
解説する中原医師